市長室からこんにちは

vol. 102

益田市長
山本 浩章

約1年ぶりの投稿のきっかけは、南米最南端のフエゴ諸島に住んでいたクリスティナ・カルデロンという93歳のチリ人女性の死亡記事を目にしたことです。その土地のヤーガン語の最後の話者だった彼女の死は、一つの言語の消滅を意味したのです。

3千とも7千とも言われる世界の言語の多くが、悲しいことに消滅の危機にあるとされます。ユネスコは、消滅の危険度ごとに区分したリストを公表していますが、「最も深刻」としてランクされている言語の一つがアイヌ語です。かつて北海道はもちろん、東北地方や千島、樺太でも話され、現在も「知床」や「苫小牧」など独特の地名に名残をとどめるものの、すでに話者が1桁しか生存しておらず、消滅が目前に迫っています。

言語の保存と再生が民族の大事業とされることもあります。アイルランドでは、ケルト民族の言語であるアイルランド語（ゲール語）を英語と並ぶ公用語とし、話者に様々な優遇措置を与えています。また、現在のイスラエルの公用語であるヘブライ語は、いったん消滅した古代ヘブライ語を必死の努力で千数百年ぶりに復活させたものです。

一方で、私たちの国語について「乱れ」が指摘されることがあります。俗語や流行語を嫌う人は決して少なくありませんし、「見れる」「食べれる」などの「ら抜き言葉」が「正解」となるのはまだ先のことでしょう。しかし、絶え間ない変化は、言葉が「生きている」ことの証とも言えます。

私たちの使う日本語は始めは乳児期に親世代から口伝えに教わり、親世代もまたその親から承継したものです。当然、2世代か3世代の間の意思疎通に何の支障もありません。しかし、例えば、1300年前の奈良時代の言葉となると、意味も表記も発音も、専門的に研究しなければ理解できません。鎖の一つひとつはほぼ同じもののつながりでも、遠く遡った先にあるのは完全に異質な姿なのです。

生きている日本語は、これからも目新しい語彙や新鮮な表現への置き換わりを繰り返し、未知の言葉へと変化していくのでしょう。

ひとが育つまち益田

「ひとが育つまち益田」の実現に向けて
～「ひとづくり」の取組と職員の想い～

Vol.5

市では「ひとづくり」を重要な要素として「ひとづくり推進本部」を設置し、3つの部会で取組を推進しています。

今回は「産業の担い手」部会を担当する農林水産課に所属する職員が、取組内容の紹介と「ひとづくり」に対する想いを語ります。

ひとづくりに関するどのような取組を担当していますか

「ますます食と農の基本計画」に基づいて、市民の皆さんが「農」に興味を持ち、市全体で益田の「農」を支えてもらえるよう、幅広い世代に向けて農業の楽しさに触れてもらう活動や情報発信をしています。

未来を担う子ども達に益田の「農」や「農業者」のことを知ってもらうため、産地見学や学校給食での地産地消活動を行なっています。また、益田翔陽高校と協働して農業情報の発信や地産地消給食を行うなど、高校生自らが関わることで益田の「農」について考え、益田の「農」を「支えるひと」になってもらうための取組を行なっています。

ひとづくりの取組に対する想いを教えてください

対話や交流を通して相手の考え方や魅力に触れ、自分もそうありたいと意識が変わることで、ひとは成長すると思います。多くの人に「意欲的に農業に取組み、生き生きと農業を楽しんでいるひとの生き方や考え方に触れてほしい」と思っていますが、こうした体験をしても、実際に就農する人はわずかだと思います。益田の「農」を知り、身近に感じてもらうことで、農村での草刈りや農業用水路の清掃活動に参加したり、地元の農産物を優先して購入したりするなど、農業を生業としなくても益田の「農」を「支えるひと」になってもらいたいと考えています。

これからどのようなことに取組んでいきたいですか

「農」を支えるひとづくりに欠かせないのは「農」の魅力を伝える「農業者」です。多くの「農業者」がさまざまな取組に参加し、市民の皆さんと共に成長することで益田の「農」が元気になり、活性化すると考えます。この取組の輪を広げ「農」に興味を持った方や高校生らの若い力を活かせるしくみづくりに挑戦したいと考えています。

益田版カタリ場（農業者編）

問 市政策企画課 ☎31・0121